



## 主張

# 熱と愛をもった改革の一步を

横 畠 道 彦

幼少の頃、テレビのスイッチをつけると野球、バレーボール、テニス等、「スポ根」と呼ばれるアニメが、よく放映されていました。しばらくして「攻撃的で乱暴な少年たち」がラグビーを通して更生していく学園ドラマが話題にもなりました。熱と愛にあふれる劇中の先生と自分を重ね、教員になる夢を強くしていったことも事実です。

三六年前、現任校に新任教員として赴任した時、当時の校長先生から、中学校教員としての心得を告げられました。「部活動を強くすること」が三番目にあつたことを覚えていました。ここぞとばかりに部活動に力を注ぎ、生徒の完全下校時間を無視したことも度々ありました。現在も校舎の玄関や校長室には、優勝旗や優勝盾が並んでいます。時代が変わっても、中学校の部活動は生徒や保護者に人気がある教育活動です。

しかし、本校では三〇数年の間に生徒数が激減し、サッカーや野球等の団体競技部は、多くが廃部となりました。また、教員の減少や世代交代が進む中で、未経験者に部活動の顧問を担当いただく状況もあります。残念なことに、本校を含めた多くの中学校の部活動は、生徒の安全・安心や指導の質の確保が十分であるとはいえません。また、教員の時間外勤務に頼らざるを得ない状況もあります。



このような中、「運動部活動の地域移行に関する検討会議」からの提言では、令和五年からの三年間を「改革集中期間」として、運動部活動の地域移行を全国展開する方向性が示されました（文化・芸術関係の部も同様）。加えて、そのための体制整備と自治体支援の予算措置もできつつあります。つまり、国の主導により、部活動が段階的に中学校からなくなることになりました。一方、部活動は、生徒にとって、運動・文化・芸術・科学などへの興味や関心を高める場であり、学年をこえた生徒間の交流や教職員等との触れ合いを通して、協調性や社会性を育む人間形成の重要な場でもあります。また、部活動が学校生活の支えとなっている生徒もおり、生徒指導上の意義があることも承知しています。

先日、職員室で、部活動の指導を終えた教員が「これからの部活動について」を議論している場に出くわしました。「拠点校方式で運営できたら、生徒の選択肢が増えるし教員の負担を減らすことができます」「野球部と草野球サークル二つあれば、質の高い野球と野球を趣味とする生徒双方が満足できます」「今改革しなければ、部活動がなくなると感じます」など、真剣かつ前向きに部活動改革の必要性を考えている若手教員の姿がありました。生徒のために部活動を推進する教員から、生徒のために部活動を改革する教員が、生まれはじめていることに大きな喜びを感じた瞬間です。

部活動改革は、そう簡単なことではありません。しかし、ここに至る部活動の現状を無視したり否定したりすることなく、「どうすれば生徒と教員双方にとって良い部活動になるか」を考え行動に移していくことが今、まさに必要です。「良い」「できる」と思ったことを、熱と愛と覚悟をもって実行できる校長でありたいと考えます。

（全日中副会長・徳島県美馬市立協町中学校長）